# 『篁物語』の歌物語性について
## ―兄妹間の恋愛描写と異母妹の歌「たまぼこの道交ひなりし君なれば～」から―

湯淺 幸代

### 一　はじめに―『篁物語』の特徴

『篁物語』は、歴史上実在する人物・「小野篁」（八〇二―八五二）と異母妹との悲恋を主として描く物語であり、和歌贈答の場面を多く含む。そのため、形式的には「歌物語」に見えるが、実体としては「歌物語」に似せた「作り物語」であると考えられる。[1] その理由は、小野篁をはじめ、実在する人物の明確な実作が一首もないこと、また物語全体として、和歌を中心に据えた展開を持ち合わせていないことなどがあげられる。[2] 一方、『伊勢物語』は、『古今和歌集』に入集する業平歌・三十首をすべて含み、その他にも多くの実作がとられている。『伊勢物語』が、和歌の詠まれた背景に注目し、その歌語りを骨子とする物語であることは間違いなく、その違いは明白である。ただし、『篁物語』には、『小野篁集』という名の写本があり、『在五中将の日記（物語）』、『平中（貞文）日記』など、他の歌物語同様、『篁日記』とも古くから呼称されており、外形的とはいえ、「歌物語」的性質を持ち合わせていることも確かである。

たとえば、『篁物語』の冒頭文「親のいとよくかしづきける人のむすめありけり」[3] は、「大切に育てられた娘」（ここでは篁の異母妹）が、後に親の期待を裏切り、思いがけない男に奪われるという歌物語の一形式に則る語り出しである。[4] また小野篁を主人公としながら、最初にその相手から語り始めることについては、『本院侍従集』のような歌集においても見られる形式であり、[5]「歌語り」との親和性を感じさせる。

しかし、前稿で論じたように『篁物語』には、女主人公に対する「継子虐め譚」的要素が異母妹に対して見られることから、[6] この冒頭文は継子譚の女主人公を紹介する一文のようにも読むことができる。このように、『篁物語』には、歌物語、作り物語、説話（特に右大臣の娘に求婚する第二部）、といった様々な要素が混在し、作り物語としては長編となる『うつほ物語』や『源氏物語』に大いなる示唆を与えた可能性がある。[7]

このように、歌物語と作り物語との間を架橋するような『篁物語』のあり方について、本論では、その歌物語性について考えてみたい。方法としては、現存する歌物語との主題（テーマ）の比較、また歌中の語を検討することで、成立時期についても視野に入れつつ、『篁物語』の文学史上の意義について迫りたい。

## 二　兄妹間の恋愛描写―『伊勢物語』四十九段と『平中物語』二十九段―

『篁物語』が主として描く「兄妹間の恋愛」は、妹が亡くなった時に小野篁が詠んだとされる古今集歌[8]「泣く涙雨と降らなむわたり河水まさりなば帰りくるがに」（哀傷・八二九）を発想の起点としている。しかし、「兄妹（姉弟）間の恋愛」については、『伊勢物語』四十九段の影響が後世にわたって顕著であり、同じ歌物語である『平中物語』二十九段も同様のテーマを有している。[9]これらの例は「兄妹間の恋愛」を「歌物語」のように書く上で、重要な作品であったと考えられる。まず、『伊勢物語』四十九段の贈答から見ていきたい。

むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、

うら若みねよげに見ゆる若草を人のむすばむことをしぞ思ふ

と聞えけり。返し、

初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな

（新編日本古典文学全集『伊勢物語』一五五―一五六頁、以後『伊勢』の引用は同書）

男は、妹がたいそう美しい様子を見て、思わず「ねよげに見ゆる」（添い寝をしたく思われる）と己の気持ちを打ち明けてしまう。妹については、「うら若み」「若草」とその「若さ」「青さ」が強調されており、これからより成長し、誰かと結婚してしまう前に気持ちを伝えておきたい男の焦りも窺えよう。また若さの強調で言えば、『伊勢物語』の初段「初冠」でも、元服したての男が思いがけず心を奪われた相手は一いとなまめいたる女はらから」（若く瑞々しい女性の姉妹）であり、歌の中でも「若紫」と呼ばれていた。そのように考えると、妹が結婚できる状況になってすぐに詠まれた歌であるのかもしれない。このような歌を贈られた妹は、「草」「うら」と贈歌の語を用いて、「初草のように珍しく思いもよらないあなたの言葉ですこと。そのようなあなたを兄として信じ切っていたのでした」と素直に感情を吐露している。まだ男女の関係に慣れていないとはいえ、相手の意を言葉で受けつつ、私にはなかった「うら」（心の隔て）があなたには（隠された想いとして）「あった」とうまく切り返している。

この章段は、『源氏物語』の若紫巻に描かれる若紫と光源氏の関係に影響を与えており、[10]若紫の「幼さ」は、この四十九段の妹のイメージを反映している可能性がある。また、男は妹のことを「いとをかしげなりける」と見ているので、直接的に妹の容姿を見ていたというよりは、几帳越しなどでその様子を感じ取っていたのであろう。『篁物語』でも、最初は御簾に几帳を隔てて異母妹は篁から漢籍の講義を受けていた。また男の贈歌の傍線部「人のむすばむことをしぞ思ふ」（他人と結婚してしまうことを残念に思う）については、この和歌に、妹の相手となる「第三者」の存在が想定され、男の告白の契機となっていることに注意したい。『篁物語』では、途中、異母妹に積極的にアプローチをしかける「兵衛佐」が登場し、結果、膠着状態にあった篁と妹の仲は進展している。またこの男の歌について「聞えけり」と、妹に敬語が用いられている点、男との身分の違いを感じさせ、『篁物語』同様、この「若草」が男の異母妹であったとも考えられるのである。[11]

さらに、『伊勢物語』の写本には、一いとをかしげなりけるを見をりて」の異文として、「いとおかしげなるきむ（琴）をしらぶとて」[12]などがあり、そのような本文を受けてか、『源氏物語』には「在五が物語描きて、妹に琴教へたるところの、「人の結ばん」と言ひたるを見て」[13]と記されている。現存する『伊勢』の本文には「兄が妹に琴を教える」とまでは書いていないが、『篁物語』の場合も、その出会いは、異母兄・篁が師として漢籍を妹に教えることを発端としている。また『平中物語』二十九段には、次のように琴を弾く女性と「疑似兄妹」の関係を結ぶ男の話が語られている。

それに、人まじりて、琴などをかしう弾きて、ものをかしういふ人ありけり。男、なほしもあらで、一この琴弾くはたれぞ」と、頼もし人に問ひければ、「ここに通はるる御親族などぞ」といへば、それに、この男、いかでかと思ふ心つきにけり。さて、このもとよりの人の聞くに、え気色ばみてはいはで、「おのが身は、いとくちをしく、妹もなければ、この琴弾きたまふは、妹背山にやは頼みたまはぬ」と、男いへば、琴弾く女、「われも、兄なきわびをなむする。寄せむかし」といへば、集りて、いひすさびて、夜明けにければ、帰りにけり。朝に文どもやるとて、

〔男〕くずれすな妹背の山の山菅の根絶えばかるる草ともぞなる

返し、

〔女〕山菅は思ひやまずのみ繁れどもなにか妹背の山はくづれむ

（新編日本古典文学全集『平中物語』五一〇―五一一頁、以後『平中』の引用は同書）

男は、「頼もし人」を求婚する女の家の手引き者としていたが、同じ邸に通う別の「琴などをかしう弾く親戚の女性の話をこの者から聞き、心惹かれる。元々求婚していた女に気兼ねした男は、この琴を弾く女に「妹背山」（兄妹）の関係になることを申し入れ、女もそれに同意する。贈答では、二人がなんとか「妹背の山」（兄妹の関係）をくずさないことで、山菅の根を枯らさないよう（お互い会う機会がなくならないよう）誓い合う。二人はこの後も贈答しているが、最終的に別の場所で会うことを約束し、親戚の女性の家で、人知れず「男女」として契りを交わす。

琴を弾く女性を、まずは「妹」として関係を結ぼうとする男の発想は、『伊勢物語』四十九段に描かれる琴を弾く妹と兄との話に基づいているのかもしれない。つまり、表向きには兄妹関係を維持しつつ、実質は、恋愛関係になることを意図したものであろう。また二人の贈答に「妹背の山」が用いられていることは、『篁物語』の冒頭の歌のやりとりをも髣髴とさせる。[14]『篁物語』における最初の贈答歌は以下の通りである。

〔篁〕なかにゆく吉野の河はあせななん妹背の山を越えて見るべく

とありければ、「かかりける」と心づかひしけれど、「なさけなくやは」とて

〔妹〕妹背山かげだに見えでやみぬべく吉野の河は濁れとぞ思ふ

（『篁物語』二五頁）

この後も贈答は続くが、最初の和歌に「妹背の山」が詠み込まれていることに注目したい。妹背の山は吉野川によって隔てられているが、それが干上がってほしい、互いに見ること（結婚すること）ができるように、と願う篁であった。しかし、このような気持ちが兄にあったことを知った妹は警戒する。とりあえず、情趣を解さない人と思われたくない妹は、返歌をするものの、「かげだに見えでやみぬべく」（その姿さえ見えないで終わるように）、「濁れとぞ思ふ」（増水して濁ってほしい）と、言葉の上で真っ向から篁の気持ちに反発している。兄の気持ちを知った驚きは、『伊勢物語』四十九段の妹に近いようであるが、この「妹背山」の贈答を成立させることで、次第に『平中物語』のような男女関係にいたってしまうことも予感させるのである。

『篁物語』の成立時期については、平安時代初期から鎌倉時代以降まで幅広く考証されてきたが、篁と異母妹の悲恋を描く主要部（第一部）については、およそ『古今和歌集』成立以降、平安時代末までと考えられている。[15]近年では、国語学の見地から安部清哉氏が精力的に論考を発表しており、第一部は、十世紀後半、また『源氏物語』の浮舟歌の分析により『源氏物語』以前であることを指摘している。[16]『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』といった歌物語は、歌

集や各物語にそれぞれ重複している話もあり、古今集～後撰集時代を背景とした歌語りが元にされていることは明らかである。

一方、『落窪物語』の姫君のように、母によって異母妹が部屋に閉じ込められるなど、継子譚の影響が見られる『篁物語』は、やはりそれらより後の成立と考えられる。さらに、光源氏が継子譚における男主人公（紫の上の相手）、継子（明石の姫君）の実父、継子（玉鬘）の敵役など、いくつもの役を演じるように、篁も男主人公ながら、異母兄として兵衛佐との仲を邪魔し、妹を苦しめる存在（敵役）となる点[17]、注目される。このように、継子物語を異化する『篁物語』は、『源氏物語』が継子譚の描く女君の幸せに懐疑的で、むしろ女君の「心の流離」を徹底的に描くありようにも通じている[18]。

また、多くの女性たちと贈答する業平や貞文をモデルとする歌物語の主人公と異なり、大方、妹に一途な主人公である篁の人物造型は、むしろ『うつほ物語』のヒロインであるあて宮に恋して死する同母兄・仲澄や、大学の学生として官位の低さを卑屈に感じる『源氏物語』の夕霧に近い[19]。篁を含むこれらの人物は、女性を探し求めて多くの場所に出入りする色好みではなく、身近な相手に恋をする生真面目な人物として造型されている。いわば、誠実ながらも恋に不器用な者たちであり、このような恋物語の主人公は、むしろ歌物語の時代以降に活躍すると言える[20]。しかし『篁物語』に描かれる兄妹間の恋愛は、その出会い（兄が妹に漢籍を教える）、贈答（妹背山の歌）、兵衛佐との三角関係[21]など、およそ歌物語における兄妹間の恋愛描写と一致しているのである。

## 三　異母妹の歌「たまぼこの道交ひなりし君なれば～」について

『篁物語』では、篁と異母妹との贈答が中心に記されるが、途中、稲荷詣での道行きで出会った兵衛佐と異母妹との贈答がいくつか見られる。その中に、次のような異母妹の歌がある。

たまぼこの道交ひなりし君なればあとはかもなくなるとしらずや

見て、「ざれたるべき人かな。うたて、まがまがしうも、言ひたるかな。いかに言はまし」と思ふ。時の大納言の子なりけり。

（『篁物語』二九頁）

兵衛佐は、稲荷詣での折、異母妹に声をかけ、その後、家をつきとめて歌を詠み送ってくる。この稲荷詣でには、篁も同行しており、この時から、一貫して篁は、兵衛佐と妹との仲を邪魔している。稲荷詣での時の異母妹の心中は、はっきり描かれていないが、兵衛佐からの贈歌に対し、切り返しながらも返歌をしたため、兵衛佐に期待をさせたようだ。また篁は、妹をすぐに車に乗せ、その場から離れさせたが、兵衛佐の従者に後をつけられ、再び歌が詠み送られる。しかし、使いの童が篁に見つかり、妹の親にも知られそうになって、慌てた童は妹からの返事を待たずに帰ってきてしまう。再度、兵衛佐から詠み送られた歌は「あとはかもなくやなりにし浜千鳥おぼつかなみにさはぐ心か」という歌であった。その歌への返歌とそれに対する兵衛佐の印象が先の引用部分となる。

まず、兵衛佐が返歌を見て感じた妹への印象「ざれたるべき人かな」の解釈について「ふざけていそうな人だな」という従来の説に対し、『小野篁集全釈』が『源氏物語』で光源氏が少女時代の紫の上（「かれはざれて言ふかひありし」若菜上巻）を女三の宮と思い比べる用例を挙げ「利発で機転が利いている」の意であると説明している。ただそれに続く「うたて、まがまがしうも、言ひたるかな」については、その歌が兵衛佐を不快で縁起でもない気持ちにさせたことを表している。上記の「ざれたる」も、兵衛佐にとっては「扱いにくい、困った」

性分に感じられたはずで、肯定的な意味ではなかっただろう。また前節で検討した『伊勢物語』四十九段の妹について、『源氏物語』の匂宮は、自分の姉妹である女一の宮（返歌をしない）と比較し、「ざれて憎く」思っている。こちらも慎ましい女一の宮と比べての発言であるので「利発すぎて可愛げがない」という否定的なニュアンスであろう。実際、兵衛佐の「不快さ」の大部分は、妹からの手紙（「浜千鳥」で表現）がもらえないために「あとはかもなくやなりにし」（跡がなくなってしまった、手がかりがなくなってしまった）と、嘆く意図で用いた言葉を、妹が「跡はたどりようがありません」と、二人の関係性の消去に転換させたことにある。しかし、もう一つ考えてみたいのは、「たまぼこの道交ひなりし君なれば」（道で行き会ったあなたなので）という上句の表現である。

「たまぼこの」（玉桙の）の語は、「道」にかかる枕詞として知られ、『万葉集』に三十首以上、『古今六帖』に二十首以上、見られる表現である。しかし、その後は、『古今和歌集』一首、『後撰和歌集』〇首、『拾遺和歌集』三首、と、平安期の勅撰集にはそれほど採られていない。ただし各集において、「道」を詠みこんだ歌が少ないわけではなく、それぞれ二十首前後「道」の歌を含んでいる。ただし「たまぼこの」という枕詞を有する歌に特徴的なのは、たとえば『古今和歌集』の業平歌「つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」（哀傷・八六一）に歌われるような観念的な「道」ではなく、人の往来が現実にある実体的な「道」であることである。つまり、『万葉集』などにおいては、往来のある実体的な道が多く詠まれているということであろう。

また「たまぼこの」という枕詞については諸説あるが、「ほこ（桙）」については、従来、三叉路に立てられた石神の中にある「陽石」（邪悪なものの侵入を防ぐ）を意味しているのではないかという説が言われてきた[22]。その後、「木偏」という用字の問題から、木製の祭具、また先払いのための呪具[23]、あるいは実用的な護身具（神霊の依り木となる）といった説[24]も唱えられたが、いずれにせよ、古代の「道」が、中央と秩序外の地を結ぶ、霊異に充ちた荒ぶる世界[25]として認識され、それらを鎮める作用を「玉桙」が担っていたと考えられる。また現実に即してみても、人の往来のある「道」とは、未知なる男女の出会いの場であり、恋しい人を遠き世界へ送る別れの場所であり、愛しい相手が危険を冒して通ってくる場所であった。「たまぼこの」の枕詞によって詠まれる歌に「神」や「占」を詠んだ歌が見られるのも、そのような出会いや場所をつなぐ存在としての「道」の境界的な在り方が関わっているのだろう。以下、先に挙げた勅撰集で「たまぼこの」の語が詠まれた歌を挙げる。

①たまぼこの道はつねにもまどはなむ人をとふとも我かと思はむ
（古今集・恋四・七三八・因香朝臣）

②夏山の影をしげみやたまぼこの道行く人も立ちとまるらん
（拾遺集・夏・一三〇・紀貫之）

③たまぼこのとほ道もこそ人はゆけなど時のまも見ねば恋しき
（拾遺集・恋二・七三七・紀貫之）

④恋ひ死なば恋ひも死ねとやたまぼこの道ゆき人に事づてもなき
（拾遺集・恋五・九三七・柿本人麻呂）

①は、相手が通ってくる道について、他の人の元を目指していても、自分の元を訪れようとしていると思えるように、いつも道に迷ってほしいと詠んでいる。ここでの道は「迷う怖れのある道」であり、相手が「実際に通ってくる道」である。また②は、屏風歌ではあるが、夏山の木陰が生い茂っているので、道

行く人が立ち止まって休む様子が歌われている。本来は往来の場所である道が、ここでは「立ち止まる場所」とされている。また③は、遠い道のりであっても世間の人は躊躇なく出立するのに、どうして私はひと時でもあなたと会えないのが恋しくてたまらないのだろうか、と歌う。詞書によれば、毎日のように会っていた源公忠に会えなかった日に詠まれた歌で、公忠は天慶四年（九四一）に近江守となるため、ここでの「遠道」は、公忠が「地方へ下向する道」として想定される。その道には多くの危険が伴うだろう。また④は、恋死にするというならそのように死ねばよいということなのか、我が家の前を通り過ぎていく人から何も伝言がない、と冷たい相手を恨む歌が詠まれている。ここでの道は、「相手が通ってくるはずの道」である。

このように、②は、例外的に屏風歌の例であり、道で休む穏やかな風景が歌われているが、①・③・④は、恋しい相手が実際に通る「道」であり、そこにはさまざまな困難と生々しい感情が歌われている。「たまぼこの」という枕詞は、そのような「道」にまつわる邪な感情をも鎮める役割を果たすようにも見える。ただ『篁物語』の異母妹の歌「たまぼこの道交ひなりし君なればあとはかもなくなるとしらずや」の歌では、その道が「偶然行き会った道」であり、①～④の歌とは距離があるので、他の例を検討してみたい。

平安期の私家集では、紀貫之がこの枕詞を含む歌を十二首詠んでおり、それ以前が、人麻呂集四首、躬恒集三首、家持集が二首であることに鑑みても、圧倒的に多いことがわかる。またその詠みぶりは、①のように道にまどう歌、②と同じく自然によって道に立ち止まる歌、③のように道の遠さを詠む歌がある。ただしこれらの歌は、貫之以前にも見られる歌であるが、貫之歌に特徴的なのは、「祈りくる神ぞと思へばたまぼこの道の遠さも知られざりけり」（四六一）のように、「神」の存在が詠みこまれるところである。貫之の「たまぼこ」歌には屏風歌が多く、また旅の餞別につける和歌を多く依頼されているためか、十二首中、三首に「神」の語が詠みこまれている。[26]『篁物語』では、兵衛佐と異母妹が、最初の贈答で「神」の語を用いて歌を交わしており、特に妹が「石神」を詠んでいるところは、ここで「たまぼこ」の語を用いて返歌をすることと関わりがあるのかもしれない。[27]しかし、妹の言う「道交ひ」という語は、これ以前に和歌で詠まれることはない。ただし、行きずりの人、行きずりの出会いと別れ、という意味で、平安期に「たまぼこの」枕詞が詠まれた歌に、次の例がある。

⑤夏草は茂りにけりな［たまぼこの］道ゆき人もむすぶばかりに
（元真集・二五一）

⑥［たまぼこの］道ゆきぶりはあだなれど行く末遠き頼みをぞする
（能宣集・三二五）

⑦［たまぼこの］道ゆき違ふかり人のあと見えぬまで暗きあさぎり
（恵慶集・九〇）

⑤は、内裏の歌合に詠進した歌で、道を行き交う人々の縁も結ぶように、夏草が生い茂っている様を歌っている。道の景物・夏草の様子が媒介とされているが、行き交う人々の縁結びを歌う点、兵衛佐と異母妹との道行きの出会いに共通する。また⑥は屏風歌で「男女が立ち寄って話をしている場面」とあり、道行の出会いが「あだ」（いい加減なもの）とわかっているのに、それを遠き末まで頼りにしていることよと詠んでいる。道端の男女は、異母妹の歌とは反対に、行きずりの出会いを頼りにする様が窺える。⑦の歌は、九月の花見において、道で行き違う人（「たび人」の異同有り）の後ろ姿まで見えないほど暗い朝霧（「秋ぎり」の異同有り）が立ち込めている様を示すが、「あと見えぬ」という語は、異母妹が「あとはかもなくなる」とその出会いの儚さを表現したところ

に近い。各歌の詠み手である藤原元真、大中臣能宣、恵慶法師は、村上朝以降に活躍し、その歌は『拾遺和歌集』以降の勅撰集に入集している。[28] 歌物語の成立が『古今和歌集』や『後撰和歌集』の成立時期と関わるのに対し、『篁物語』については「たまぼこの」の枕詞を用いる歌に関して言えば、少し遅れて『拾遺和歌集』（一〇〇六年頃か）前後の成立を視野に入れるのが良いのかもしれない。ちなみに歌物語における「たまぼこの（に）」の使用例は、『平中物語』に二首あるが、いずれも「道」の語を含んでいない。

⑧ たまぼこに君し来寄らば浅茅生にまじれる菊の香はまさりなむ

（『平中物語』二十一段、四八七―四八八頁）

⑨くやしくぞ奈良へとだにも告げてけるたまぼこにだに来ても問はねば

（『平中物語』三十六段、五二六頁）

⑧は、大納言・藤原国経から送られてきた手紙の返事に、男（平中）が美しい菊をつけたところ、再び歌が届き「老翁だが杖をついてでも、その美しい菊が咲く仙境を見てみたい」というので、男は「道すがらでもあなたがお立ち寄りくだされば、荒れた庭に混ざって咲く菊の香りもいっそうまさるでしょう」と、詠んだ歌である。男は臣従の立場にあり、ここでの「たまぼこ」は、「通りすがりの道」を意味している。

また⑨は、時折言い交わしていた女が、突然、「奈良へ行くのでお尋ねください」という意の和歌だけを残していなくなった後、偶然、男が長谷詣での帰りに女の家を見つけた際、女性の側から詠みかけた歌である。「奈良へ行くと告げたのに、道すがら探してもくれない」と悔しがる内容で、ここでも「たまぼこに」の語は、「道」の意を示すが、女は相手の訪れを求めており、『篁物語』の例とは距離がある。

また、作り物語中では、『うつほ物語』『源氏物語』に一例ずつ見えるが、同じく「道」の枕詞としては使用されていない。単独で「道」の意を表すようにも見えるが、ともに道端における思いがけない縁を基にした贈歌である。

⑩からもりが宿を見んとてたまぼこに目をつけむこそかたは人なれ

（『うつほ物語全』「楼の上・下」おうふう、八八九頁、表記は一部改めた）

⑪夕露に紐解く花はたまぼこのたよりに見えしえにこそありけれ

（新編日本古典文学全集『源氏物語』「夕顔」一六一頁、表記は一部改めた）

⑩は、源涼が藤原仲忠の作った楼の前を通り、思わず『唐守』（散逸物語）のように、道の途中で邸内を見ようと目をこらしてしまった自分をみっともないと詠んでいる。また⑪は、光源氏が廃院に恋人の夕顔を連れ出した後、詠みかける歌であり、「たまぼこのたよりに見えしえ（縁）」とは、夕顔との通りすがりの道で出会った縁を意味している。

『篁物語』の異母妹の歌は、発想として⑤・⑥・⑦の歌に近く、『平中物語』の例のように相手の訪れを求めたり、行きずりの縁の相手を愛しく思ったりする『源氏物語』の光源氏とは反対に、「通りすがりに出会っただけ」と相手をはねつける歌である。また「道交ひなりし君」と歌中にあるが、仮名散文における「道交ひ」の語の初出は、管見のかぎり『源氏物語』明石巻の例である。[29]『源氏物語』では、明石にいる光源氏に二条院からの使者が「「道交ひ」（道の途中）で出会っても人が何かと見分けられないほどの賤しい男」として表現されており、そのような男でも紫の上の手紙を持ってきたことから、源氏には親しく感じられたと語られている。

⑧の歌も、男相手の返歌ではあるが、そこには身分差があり、「たまぼこに」（道ばたの）「浅茅生」の家に住む私を尋ねてくれる「君」として、自らを卑下し、相手を敬う歌となっている。篁の異母妹が、兵衛佐を「道交ひなりし君」（通りすがりに会ったあなた）と呼ぶこと自体、失礼なことであったのかもしれない。ここで、初めて兵衛佐が「時の大納言の子なりけり」と、その身分について明かされることに注意したい。異母妹の歌は、身分の違いをものともしない気の強さを示していたのではないだろうか。また、歌物語との比較で言うと、「相手の訪れを求める」意を反転させており、そこには、歌物語とは異なる異母妹の新たな人物造型が窺えるのである。

## 四　結語

以上、『篁物語』の歌物語性について、「兄妹間の恋愛」という主題と、異母妹の歌「たまぼこの道交ひなりし君なれば～」の歌から検討してみた。歌物語における「兄妹間の恋愛」については、『伊勢物語』四十九段が、兄から妹への告白、またそこに第三者への意識があることを指摘し、『篁物語』との共通性を確認した。また異文では、兄から妹への教授が示されていた可能性があり、その点も一致している。『平中物語』では、まず疑似兄妹の関係から恋愛関係へと移行しており、「妹背の山」を介して交わされる贈答が、『篁物語』の贈答と近しいことを指摘した。ただし、これらの要素としての共通点とは裏腹に、人物造型の面では、篁が歌物語に見られるような色好みではなく、『うつほ物語』や『源氏物語』に描かれる真面目で不器用な人物に近いことから、その成立も、歌物語より後である可能性を考えた。

また、異母妹の歌は、主に枕詞「たまぼこの」に注目して検討を進めたが、『拾遺和歌集』の成立前に活躍した平安中期の歌人の詠みぶりに近く、相手の訪れを求める歌物語の例とは距離があった。さらに、大納言の子である兵衛佐を「道交ひなりし君」と呼ぶに至っては、身分差をものともしない異母妹の強さが読み取れた。このような異母妹の人物造型には、前稿で指摘した「書読む女」の自立性も関わると思われるが[30]、親に従う「家の女」、また「継子」のような従順さは妹になく、内侍としての出仕を願った親の期待を裏切り、篁の愛を受け入れる未来に自然と引き寄せられていく。結果、実母に監禁され、自ら食べ物を受け付けず死にいたる点は、思いも寄らない男に奪われ死にいたる歌物語の女性たちと一見、同じように見える。ただしその内実は、自ら恋の成就のため主体的に選んだ「死」なのであり、『源氏物語』宇治十帖の大君の死と同じような意志が感じられる点[31]、その歌物語性は、あくまで外形的なものと見てよいだろう。

総じて人物造型については、男主人公、女主人公、ともに歌物語や作り物語に見られた従来の像（色好み・男を待つ女）をずらす試みが見られ、その新しさが際立っている。「色好み」が脇役、敵役のようになっていくのは、『源氏物語』宇治十帖の匂宮に始まり、平安後期以降の物語に顕著であるが、「兵衛佐」についてもその萌芽が見られ、文学史的にも主人公像の過渡期と言える作品なのではないだろうか。

### 註

（1）たとえば『篁物語』（日本古典全書、一九五九年）山岸徳平による解説では「歌が多いからこそ、この物語は即ち歌物語であるといふ事は出来ない」と言い、『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』が多かれ少なかれ、物語の中核となる歌があり、歌が物語展開の契機となり、媒介となり、集結となる基本的性格を持つのに対し、『篁物語』の歌がそのような役割を果たしていないことを指摘する。また「一見歌物語風に見えるけれど、やはり作り物語と言ふべきであらう」と述べる。現在の辞書類（日本国語大辞典、日本大百科全書等）においても、『伊

勢物語』が「歌物語」として説明されるのに対し、『篁物語』は大方「物語」とのみ説明されている。『伊勢物語』は、藤岡作太郎『国文学史講話』（一九〇八年）が「伊勢物語は歌物語なり。過半は業平が詠歌をとりてその由来を簡短なる小話に編めるもの、事実なるもあり、仮託なるもあり、」と説明しており、歌が業平の実作であること、その由来が小話として編まれていることなどを特徴として挙げている。また『篁物語』は、あえて篁の実作を不在にしたとも考える福家俊幸「『篁物語』と歌物語―異化の方法―」（『武蔵野女子大学紀要』三二―一、一九九七年三月）は、『篁物語』が歌物語の方法を積極的に異化し、むしろニセモノ（虚構）の伝記であることを強調する作り物語であると述べている（『歌語り・歌物語辞典』（勉誠出版、一九九七年）の福家氏記述の項にも同旨の記述あり）。本論では、菊田茂男「篁物語の構造についての試論」（『東北大学文学部研究年報』一四号、一九六四年三月）の区分にならい、篁と異母妹の悲恋譚を第一部、篁と右大臣の娘の結婚譚を第二部として扱う。

(2) 小野篁の詠歌は、『古今和歌集』に六首入集しているが、そのいずれも『篁物語』に採られておらず、逆に『新古今和歌集』以降の勅撰集には、『篁物語』より歌が採られていることから、『篁物語』の詠歌が小野篁の実作とは考えにくいことが、注一の山岸解説のほか、諸氏により指摘されている。

(3) 『篁物語』の本文は、彰考館蔵本を底本とした遠藤嘉基校注の日本古典文学大系本（岩波書店）によるが、その他、日本古典全書（山岸徳平校注）、小久保崇明編『篁物語校本及び総索引』（笠間書院、一九七〇年）、平林文雄『増補改訂　小野篁集・篁物語の研究』（和泉書院、二〇〇一年）、安部清哉「『篁物語』承空本（「小野篁集」）に関する研究課題」（『人文』七号、学習院大学、二〇〇八年）を参照し、石原昭平・根本敬三・津本信博『篁物語新講』（武蔵野書院、一九七七年）や平野由紀子『小野篁集全釈』（風間書房、一九八八年）など、宮内庁書陵部本を底本とする校訂本文とも比較して、一部本文を改めた。

(4) 湯淺幸代「篁物語と継子譚―書読む女の悲劇―」（『駒澤国文』四七、二〇一〇年二月）

(5) 註（3）『篁物語新講』の語釈で指摘。『本院侍従集』は、村上天皇の中宮・安子や斎宮女御・徽子に仕えた本院侍従の歌集であり、太政大臣・藤原兼通との贈答だけを抄出し、その恋愛過程を歌物語的に撰集したと推定されている。たとえば歌集冒頭の詞書には次のようにある。

おぼえおはしけるかむだちめ（師輔）の次郎なりけるひと（兼通）、年十八（天慶五）ばかりなるが、おぼえはいとかしこかりけれど、かうぶりえぬ有りけり。おほぢ（忠平）は太政大臣にてなむおはしける。いもうと（安子）はきさきはらのみこ（村上）に奉りて、藤つぼにぞさぶらひ給ひける。おほむいとこ（侍従）さぶらひ給ひけり。その（師輔）この次郎君おもひかけ給ひて、かくよみていれ給ひけり。（『新編国歌大観』表記は一部改めた）

(6) 註（4）論文において、『篁物語』と継子譚のプロットとを比較し、異母兄からの懸想を「継子の苦難」、篁との仲を知った実母が妹を部屋に監禁する点を「母による継子（篁ともとれる）の迫害」の要素として指摘した。

(7) 『うつほ物語』との共通性については、ヒロインあて宮の求婚者の一人として藤原季英（貧しい学生。「藤英」とも）という人物が登場しており、後に左大将の婿となって参議に至る点、『篁物語』の第二部で、篁が右大臣の娘と結婚し、最後参議にまで至ると語られる点が挙げられる。また婚儀の日、みすぼらしい格好で現われた篁の様子がこの「藤英」の描写と通うことが阿部俊子『歌物語とその周辺』（風間書房、一九六九年）他、諸注釈書で指摘されている。また『源氏物語』への影響、その共通性については、井野葉子「浮舟物語における篁物語引用」（『清泉女子大学人文科学研究所紀要』二九号、二〇〇八年、『源氏物語　宇治の言の葉』森話社、二〇一一年、所収）や、金孝淑「『源氏物語』の夕霧と『篁物語』―その構造と表現の類似をめぐって―」（『日本学報』七八、二〇〇九年二月）等に指摘されている。

(8) 『新編国歌大観』ただし表記は私に改めた。以下、和歌の引用はすべて上記に同じ。

(9) 註（7）阿部前掲書「篁物語」の章で、兄妹間の恋愛について網羅的にとり上げられている。また中村祥子「篁物語の冒頭について―異母妹との恋―」（『日本語日本文學』二八、二〇〇三年七月）では、本論で取り上げた『伊勢物語』四十九段、『平中物語』二十九段を含む『篁物語』前後の作品に描かれる「兄妹の恋」について、その状況が検討されており、特に「教える兄と習う妹」との関係性に注目する。

(10) 『源氏物語』若紫巻では、この贈答を想起させる和歌「生ひたたむありかも

知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき」「初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらん」（新編日本古典文学全集、二〇八頁）が、祖母尼君と女房との間で若紫を「初草」「若草」に喩えて詠まれており、光源氏もそのやりとりをを聞いた上で「初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬ」（同、二一六頁）と若紫を見たことを示す歌を詠んでいる。また源氏が若紫を二条院に連れ去った後、二人は兄妹のように睦み合う姿が描かれる。

(11) 妹の母の身分が高かった可能性について、新日本古典文学大系『伊勢物語』の語釈や、鈴木日出男『伊勢物語評解』（筑摩書房、二〇一三年）等が指摘している。

(12) 定家本系「伝二条為明筆本」の本文。他にも複数、同様の異文を持つ写本がある。

(13) 総角巻、三〇四頁。この『伊勢物語』に触発された匂宮は、同母姉妹である女一の宮に歌を詠みかけている。

(14) ただし、直接的には古今集歌「流れては妹背の山の中におつる吉野の川のよしや世の中」（恋五・八二八・よみ人しらず）を踏まえた歌である。

(15) ただし、物語全体を通しても、註（7）阿部前掲書では、村上朝末～冷泉・円融朝、黒木香「『篁物語』成立考―兵衛佐を手掛かりとして―」（『国文学攷』一一二号、一九八六年十二月）は、花山～一条朝初期を想定している。

(16) 安部清哉「語彙・語法史から見る資料―『篁物語』の成立時期をめぐりて―」（『国語学』一八四、一九九六年三月）、同「原『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌：九六一年から九八〇年頃―」（『研究年報』学習院大学文学部（六三号、二〇一七年三月）、同「贈答歌と会話段落構成からみた『篁物語』という〝つくり歌物語〟の創出」（『研究年報』学習院大学文学部（六五号、二〇一九年三月）等。ただし本文中の「角筆」「掻練」の語に注目する松野彩氏は、十一世紀末から十二世紀末の間の成立を想定している（『国士舘人文学』四九―五〇、二〇一七～二〇一八年）。「かく(う)ひち」（角筆）の語は、確かに平安時代末以降の用例しか見られないが、安部論文（一九九六）の言うように、一部の言葉については、十一世紀以降、何らかの手が入っていることを示す可能性があろう。また浮舟歌の検討については、注7井野論文、安部清哉「『篁物語』の井野葉子氏「『源氏物語』浮舟巻での引用」説補強ならびに祖形小考」（『古典語研究の焦点―武蔵野書院成立90周年記念論集』武蔵野書院、二〇一〇年）でなされている。

(17) 註（4）に同じ。

(18) 日向一雅『源氏物語の王権と流離』第七章・八章（新典社、一九八九年）は、玉鬘や紫の上等、継子の属性を持つ女君の物語が、継子物語をパロディ化するとともに、「流離の内面化」として第二部の主題となることを指摘している。

(19) 註（7）阿部前掲書、註（9）中村論文、註（7）金論文等。

(20)『源氏物語』宇治十帖の薫や、『狭衣物語』の狭衣中将、等。

(21) 異母妹が稲荷詣でで出会う兵衛佐については、「稲荷に詣であひて侍ける女のものいひかけ侍けれどいらへもし侍らざりければ」の詞書で「稲荷山社の数を人問はばつれなき人をみつとこたへむ」（拾遺集・一二一一・平貞文）の歌があり、この歌語りからの直接的な影響が考えられる。当時の兵衛佐のイメージについて詳細に検討した註（15）黒木論文は、この歌を指摘してはいないが、物語の「兵衛佐」に好色者の代表として、平貞文のイメージを読み取る。他にも拾遺集には「稲荷に詣でて懸想しはじめて侍ける女の、異人に逢ひて侍ければ」の詞書で「我と言へば稲荷の神もつらきかな人のためとは祈らざりしを」（雑恋・一二六七・藤原長能）の歌も入集している。

(22) 日本古典文学大系『萬葉集』一（七九補注）三三九頁、等。

(23) 堀勝博「枕詞「玉桙の」について」（『大阪産業大学論集』（人文科学編）八一、一九九四年三月）。

(24) 木村紀子「タマを冠する万葉歌語とその背景」（『奈良大学紀要』二六、一九九七年三月）。

(25) 多田一臣「玉桙の道―三九七八歌の表現をめぐって」（『千葉大学人文研究』二三、一九九四年）。

(26) 前出の四六一番歌の他「行くけふも帰らん時もたまぼこのひきもの神を祈れとぞ思ふ」（七三一）「たまぼこの手向けの神も我がごとく我が思ふ事を思へとぞ思ふ」（七三五）がある。また『万葉集』の反歌では、唯一、家持が帰京する際に詠まれた池主の歌「玉桙の道の神たちまひはせむ我が思ふ君をなつかしみせよ」（巻十七・四〇三三）と道の神が詠まれている。

(27) 兵衛佐が「人知れぬ心ただすの神ならば思ふ心をそらに知らなん」と詠み、その返しとして異母妹が「社にもあだきねすゑぬ石神は知ることかたし人の心を」と歌っている。ただし諸注釈書では、この「石神」は道祖神ではなく、稲荷神社に実際にあった石神信仰が想定されている。

(28) 藤原元真（生没年不詳）は、伯父・忠行の歌が古今集・後撰集に入集しており、自身の歌は後拾遺集以降の勅撰集に入集している。大中臣能宣（九二一―九九一）は、「梨壺五人」の一人であり、円融朝の末頃から安法法師の住む河原院に出入りし、清原元輔・紀時文・平兼盛・源重之・源兼澄・恵慶法師ら河原院グループの歌人たちとよく集まっていた。拾遺集以下の勅撰集に多数の和歌が入集している。また恵慶法師（生没年不詳）は、安法法師ととりわけ親しく、河原院にしばしば出入りしていた。拾遺集以下の勅撰集に入集している。

(29) 「二条院よりぞ、あながちに、あやしき姿にてそぼち参れる。道交ひにてだに、人か何ぞとだにご覧じわくべくもあらず、まづ追ひ払ひつべき賤の男の睦ましうあはれに思さるるも」（「明石」二二四頁）とある。『花鳥余情』（一条兼良著）は、『源氏物語』明石巻の当該箇所の注釈として、『篁物語』のこの歌の例を指摘する。

(30) 註（4）に同じ。

(31) 『篁物語』の異母妹は「消えはてて身こそは灰になりはてめ夢の魂君にあひそへ」と死後に魂としての邂逅を望むような歌を篁に詠んで亡くなっており、薫に求婚される八の宮の娘・大君は、自ら食事を摂らない形で衰弱死し「結婚拒否」の意志を貫く。